

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	辞書にないギリシア語
Author(s)	関本, 至
Citation	ニダバ , 3 : 21 - 23
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044703
Right	
Relation	



辞書にないギリシア語

関本 至

現代ギリシアの新聞・雑誌あるいは文学作品などを読んでみると、辞書にない単語にしばしば出くわし、そのつどその解釈に手間どることが少なく、あるいは意味不明のままさじを投げざるをえないことも稀にはある。辞書がなかなか役に立たないのである。だが、言葉は動くものであるから、辞書がそれを追ってそのすべてを捕えるわけに行かないのはむしろ当然のことであろう。

ところで「辞書にない単語」と一口に言っても、それが辞書に載らない理由はさまざまである。のせる必要のないものもあろうし、のせることのできないものもあろう。当該辞書編集の規模や方針に応じて採録範囲の制限もある。編集後にあらわれた新語の類は無論入りようがない。

そうしたいろいろの場合を整理してみると次のようになる：

- (1) 正書法の相違から来るもの——すなわち伝統的な正書法によらない表記であるために辞書に載らないものである。文字表記と発音の間にずれのある言語（現代ギリシア語にもそうしたずれが少ない）には起りがちな現象である。現代ギリシアの作家の中には、かなり自由に（時には大胆に）正書法からはずれた書き方をする者がおり、辞書にはない形がよく見受けられる。
- (2) 語形の浮動性から来るもの——同一の語であってしかも実際上の発音に幾通りもの慣用があるため、そのすべてが必ずしも辞書に載せられないものである。この中には、次項の俗語・方言に属するものもあるであろう。
- (3) 俗語・方言あるいは特殊な専門用語のたぐい——これらは標準語を主とする辞書には採録されないのが普通であろう。
- (4) 派生語・合成語——名詞や動詞の変化形を一々のせる辞書はない（もっとも特殊な不規則形は間々のせられるけれども）。しかし通用の派生語・合成語は大抵辞書にとりあげられており、辞書にないものがあるとすれば、それは新しいもの乃至は稀用のものと見てよからう。
- (5) 外来語——外来語は、すでに一般に使用されているものは収載されているが、なじみの浅いもの、新しいもの、個人の思いつきによって使われたものなどは載せられていない。

以上のように、辞書に載せられない語にはさまざまな種類があるが、以下においては主として(4)と(5)の場合の若干の例をあげ、多少の解説と問題点の指摘を試みようと思う。

資料は週刊雑誌および小説の中で筆者が実際に見たものからとったが、その出所は省く。

参照の辞書は Proias, Demetrakos, Goulas および Pring の 4 種にかぎった。

Pring を除いて他はギリシアで出版された国語辞書であり、通用の単語はこの 4 辞書の中で一応尽くされていると考えられるので、それらにないものを一応辞書にない語とした。

なお、ギリシア文字はラテン文字に転字し、それに発音と意味とを附記した。

(A) 合成語・派生語

合成語には、plouσιόpaido [plusiópeðo]「金持ちの息子」、bromophameliá [vromofameliá]「悪い家族」、khazokoubénta [xazokuvénda]「愚にもつかない話」、paleogúnaika [paljíneka]「悪い女」、xulopatritses [ksilopaterítses]「木製の松葉杖(複数)」、paraphinélaio [parafinéleo]「パラフィン油」、sapiobáporo [sapjováporo]「ぼろ汽船」、podosphairomaneīs [podosferomanís]「サッカーのファン(複数)」のような名詞があり、mikrósōmos [mikrósomos]「小さい体軀の」のような形容詞、kruphogelō [krifojeló]「しび笑いをする」のような動詞も見られる。

派生語には、mpratsáki [bratsáki]「小さい腕」、matáki [matáki]「小さい眼」、geitonáki [jitonáki]「小さい隣人」のように指小接尾辞 -áki のついたものが多い。この指小辞は現代ギリシア語できわめて頻繁に利用されており、この接尾辞をつけた形は一々辞書にのせないようである。丁度日本語の辞書で「お皿」「お米」を一々とりあげないのと似ている。但し、「お」のつく単語の調査が興味ある問題をふくんでいると同様、-áki 形を調べることによって現代ギリシア語、現代ギリシア人の性格や物の見方の一端を窺うことができるかもしれない。

接尾辞のついたものではこのほか portára [portára]「大戸」(-ára は指大接尾辞)も辞書に見られない。

(B) 外来語

フランス語から入った gkri-nouár [gri-nuar]「灰黒色の」、asansér [asansér]「エレベーター」、sùr-kanapé [sìr-kanapé] (料理の名)、英語から入った sònta-gouōters [sóda-guóters]「ソーダ水」、phérru-mpót [féri-bót]「フェリーボート」、ásntik [ásdik]「潜水艦探知機」、reportáz [reportáz]「ルポータージュ」、イタリア語から入った mpíga [bíja]「二輪車」、palkoséniko [palkoséniko]「ステージ」、salpárō [salpáro]「錨をあげる」、トルコ語から入った tsakír [tsakír] (飲みもの名) など、いずれも辞書にない語である。

最近のギリシアの週刊誌に次のような意味の投書が載っていた。《近頃のギリシアの新聞雑誌

にははなはだ遺憾な現象が見られる。それは余計な外来語の使用である。rēlákx [riláks] 「リラックス」とか gouēk-ent [gwík-énd] 「ウィークエンド」とか párkíngk [párkíng] 「パーキング」などといった語をなぜ使わなくてはならないのだ。≫というのである。(もっともこの投書はアメリカ在住のギリシヤ人からのもの。)

今日、外来語(とくに英語)の使用が、どの民族においても非常に増加していることは、世界的な現象であって、ギリシヤもその例外ではないわけである。そうした趨勢を辞書が追えないのも至極当然と言えよう。

なお、形はギリシヤ語ながら構成と中味は外来語という、いわゆる翻訳借用語(なぞり)もまた見られる。tēleórasís [tīleórasís] 「テレビジョン」とか podósphairá [podósfera] 「サッカーのボール」などがそれである。(但しこの二語は辞書に出ている。)最近目についた huperagorá [iperjorá] 「スーパーマーケット」はまさに supermarket のなぞりであり、どの辞書にもない。

「辞書にないギリシヤ語」を見て行くと、そこからいろいろの問題がひき出されてくる。

現代ギリシヤ語の正書法の混乱や語形の浮動性の問題。現代ギリシヤ語の派生語・合成語の豊かさ。現代ギリシヤ語の外来語摂取の情況。そのほか、既刊の辞書における採録項目の豊富さと乏しさ、古さ新しさも問題にできるし、また好んで新しい造語をする作家や新しい外来語を好む作家の文体にまで問題を及ぼすこともできるであろう。